様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　４ 月 ２６ 日現在

機関番号：１７７０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2022
課題番号：２０Ｋ００５００

研究課題名（和文）ベストセラーから見たナチス・ドイツの文学空間

研究課題名（英文）The literary space of Nazi Germany from the viewpoint of bestsellers

研究代表者
竹岡　健一（Takeoka, Kenichi）

鹿児島大学・法文教育学域法文学系・教授

研究者番号：３０２１６８７４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、本の刊行数に基づいて、ナチス時代のベストセラーの上位100タイトルを選定した上で12のジャンルに分類し、各ジャンルの概要と代表作品を考察した。その結果、100タイトルの4分の3を実用的著作やユーモア文学、娯楽文学といった非イデオロギー的な作品が占めると同時に、反体制的な作家の作品や敵対的な国々の作家の翻訳なども含まれることから、当時のドイツに自由で多様な文学受容の空間があったことを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、ベストセラーという新しい観点を交えて研究することによって、ナチス時代の文学を代表する著作が非イデオロギー的な作品であり、当時のドイツに自由で多様な文学受容の余地があったことを明らかにし、ナチズムと文学のかかわりに関する研究に、これまでの常識にとらわれない新たな局面を切り開いた。これらの成果は、関連する幅広い分野の研究に応用が可能であると同時に、ナチズムという社会的関心の高い問題の論究に資するものである。

研究成果の概要（英文）：This research project selected the top 100 titles of bestsellers in the Nazi era based on the number of publications, classified these into 12 genres, and examined an overview and representative works of each genre. As a result, it has been revealed that there was a free and diverse space of literary reception in Germany at the time. This is because non-ideological works such as non-fiction, humor and amusement literature works account for three quarters of the 100 titles, and because these also include works of writers who are against the establishment as well as translations of writers of enemy nations.

研究分野：ドイツ文学

キーワード：ナチス・ドイツ　第三帝国　ベストセラー　文学空間　文学受容

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

ナチズムの問題は､今日の学術研究にとって重要な対象の一つであり､その一角を占めるのが、ナチズムと文学のかかわりに関する研究である。これまでは、主にナチス政権によるイデオロギー的な統制、とりわけ反体制的な作家に対する禁止・排除と保守的な作家の保護・推奨に焦点があてられてきた。ヴィルヘルム・ヘフス『ナチズムと亡命 1933～1945 年』(2009) や ハンス・ザルコヴィクツ他『ナチズム作家事典』(2011) は、その典型である。だが、ナチスによるイデオロギー的な支配を重視するこれらの研究には、①ナチズムと無関係な作家・作品に注意が払われていない、②当時のドイツで本当に読まれた本は何かが解明されていない、という大きく 2 つの問題点があった。

本研究の研究代表者は、ナチス時代の文学に関する近年の研究〔基盤研究（C）2010～2012；2013～2015〕の過程で、こうした問題点が未解決のままとなっている主な原因は、イデオロギー的な観点が過度に重視され、当時の国民の文学受容の実態を捉えようとする視点が欠けていたことにあったとの認識に至った。また、続く第二次世界大戦中のドイツにおける前線兵士への本の販売に関する研究〔基盤研究（C）2017～2019〕では、本の刊行数という新しい観点を取り入れ、戦争中に前線兵士のために販売された本の刊行数を詳しく把握することにより、前線兵士によって多く読まれた本がナチズムに関連する本ではなく、娯楽文学や古典的名作であることを突きとめ、第二次世界大戦勃発を機にナチスの文芸政策が破綻していたことを明らかにした。だが、ナチス時代全体に関しては、こうした方法を用いた研究はまだなされていない。

そこで、本研究は、本の刊行数という視点を交えた研究方法を応用・発展させ、ナチス時代全体の文学受容をベストセラーという観点から考察することにより、従来のイデオロギー的な研究の問題点を打破し、ナチス時代の文学空間が、これまで考えられていた以上に自由で多様であったことを明らかにしようと試みる。

２．研究の目的

本研究の目的は、ベストセラーというこれまでにない観点から考察することによって、ナチス時代のドイツに、多様な著作物の受容を可能にする幅広い自由な文学空間があったことを明らかにし、ナチス時代の文学を研究する上で、ナチズムのイデオロギーに捉われない、新しい研究の枠組みを確立することにある。

従来のイデオロギー的な観点からの研究では、もっぱらナチスにとって禁止・排除すべき本または保護・推奨すべき本が対象とされたが、それは実際に読まれた本とは必ずしも一致しない。それに対し、本研究は、ナチス時代の本の刊行数を主な拠りどころとして、当時のドイツ国民によって実際に多く読まれた本を突きとめ、その内容の詳細な考察を通じて、ナチス時代の読書の実態を解明する。それによって、イデオロギー的な観点では捉えきれない、ナチス体制下の日常の読書風景を浮き彫りにすることを目指す。

３．研究の方法

本研究は、ナチス時代のドイツにおける文学受容の実態を解明するため、ベストセラーという新たな視点からのアプローチを試みる。そのための具体的な研究方法は、次の通りである。

(1) ナチス時代のベストセラーの選定とジャンル分けを行う。予備的な研究において一通りの作業を終えてはいるが、先行文献やドイツ国立図書館の図書目録などの書誌情報に基づいて改めて精査する。

(2) 資料の収集と研究動向の調査を行う。主として文献の講読とその分析によって進められる本研究には、資料の収集が欠かせない。ゼバスティアン・グレープ＝ケネカー編『第三帝国における文学』(2001) などの関連文献の書誌情報を参考に収集するとともに、最新の研究動向を調査する。(なお、当初はドイツ国立図書館での資料収集とライプツィヒ大学書籍学研究所での研究動向調査を予定していたが、新型コロナウイルスの影響により見合わせ、オンラインによる調査・収集や図書の購入などに変更した。)

(3) 各ジャンルの概要と代表作品の詳しい考察を行う。本研究の中心をなす作業であり、予備的な選定・分類と収集した資料に基づいて入念に取り組む。

(4) 各ジャンルの概要と代表作品の分析結果に基づいて、ナチス時代の文学の特色を解明する。予備的な研究から、①ナチス時代のベストセラーには非イデオロギー的な作品が過半数を占める、②それらを特徴づけるのは、主に実録的・実用的著作、娯楽文学、ユーモア文学である、③反体制的な作家や禁止された作家の作品も多数刊行されている、④敵対的な国々の作家を含め、外国の作家の翻訳も多く含まれている、⑤ナチス時代以前からの古典的名作も多数見られる、といった特色が明らかになっているが、それらを踏まえてより詳しく分析する。

(5) 以上の研究結果を踏まえ、本研究の研究成果を総括する。本研究の結論については、予備

的な研究から、①ナチス時代の文学の主流を占めるのは、ナチズムの思想信条に基づく著作ではない、②ナチス時代のドイツにはイデオロギーに捉われない自由で多様な文学受容の余地があった、などの興味深い仮説が得られている。しかし、本研究で得られた新たな知見に基づいて十分検討した上で、最終的な結論を導く。

４．研究成果

本研究の成果は、大きく次の 7 つの項目に集約される。

（1）先行研究を主な典拠としつつも、独自の調査によって得られたデータなども踏まえて、あくまでも暫定的なものではあるが、最終的に第三帝国時代のベストセラーの上位 100 タイトルを選定し、より適切と思われる 12 のジャンルに分類した。このうち、ナチス的なジャンルは「プロパガンダ的著作」（6 作品）、「血と土の文学」（10 作品）、「戦争文学」（9 作品）の 3 つであり、作品数は計 25 である。一方、非イデオロギー的なジャンルは「実用的著作」（12 作品）、「ユーモア文学」（10 作品）、「娯楽文学」（10 作品）、「青少年文学」（4 作品）、「外国文学」（12 作品）、「高尚な文学」（10 作品）、「非政治的歴史小説」（11 作品）、「反戦小説」（1 作品）、「戦時下の娯楽的著作」（5 作品）の 9 つであり、作品数は計 75 である。

（2）このような選定と分類の結果に基づいて、ベストセラーの上位 100 タイトルのうち 4 分の 3 が非イデオロギー的な著作に分類されることから、当時の文学を特徴づけるのが、ナチズムに関連する著作ではないことが明らかになった。つまり、ナチス時代のドイツには、非イデオロギー的な文学の幅広い空間があり、それこそがナチス時代の文学の典型をなしたのである。そこには、例えば科学小説、発明家の伝記、健康に関する啓発書、有名人の伝記、ユーモア小説、恋愛小説、探偵小説、未来小説、医学小説、社会小説、古典的名作といった非政治的・大衆的な著作に加え、イギリス、アメリカ、フランスといった敵対する国々の文学作品の翻訳、保守的な陣営からの攻撃の的となった反戦小説、および戦時下特有の娯楽的著作などが多数含まれており、プロパガンダ的な著作、民族主義的・国家主義的文学、戦争文学といった典型的なナチス文学を凌駕しているのである。

（3）また、そうした非イデオロギー的なベストセラーの特色として、その多くが娯楽的な著作であることと、文学のカノンに残るような著作がほとんど見られないという 2 つの点が突き止められた。その意味するところは、ナチス時代のドイツでは、時代を越えて読み継がれるような優れた文学作品は生まれなかったということである。その主な要因は、有能な作家が亡命や沈黙を余儀なくされたことに帰せられよう。その意味で、ナチス時代の文学空間の多様性は、質的な貧困さと表裏一体であったと言える。しかし、他方で、独裁下・戦時下のドイツにおいて、娯楽的な著作が、単に逃避的な読書や気分転換に役立っただけではなく、その一部には体制批判的な傾向や体制転覆の衝動も窺われることは、決して見落とされてはならない。例えば、エーム・ヴェルクやハインリヒ・シュペールなどの事例がこれに該当する。

（4）ところで、考察の過程で、意外なことに、ベストセラーという観点から新たに見いだされた著作の中に、ナチズムとの親和性が指摘される事例が少なからず存在することも明らかとなった。例えば、従来は「科学小説」として片づけられていた K. A. シェンツィンガーの『アニリン』（1937）において、資源の自給自足を目指すナチスの「四か年計画」や戦争遂行に対するドイツ人化学者と化学企業の積極的な貢献が語られることは、その典型である。このことは、主にイデオロギー的な観点からなされてきたナチス時代の文学に関する研究が、当時の文学の実態を捉えるには不十分であったことを、改めて浮き彫りにする。つまり、従来の研究には、多数の非イデオロギー的な作品を見落としてきたのみならず、それらの中に潜む、一見そうとは見えないナチス文学をも見落としてきたという、二重の問題点があったのである。ナチス時代の文学の実態について、先入観にとらわれない、より厳密な考察の必要性を示唆するこの研究内容が、日本独文学会機関誌『ドイツ文学』第 164 号の特集「技術／テクノロジー」で取り上げられ、高い評価を得たことは、本研究の大きな成果と言えよう。

（5）なお、『アニリン』の他にも 3 件の詳細な事例研究を行い、W. ボンゼルスの『ミツバチ・マーヤの冒険』（1912）、W. バーデ／H. ホフマンの『アードルフ・ヒトラー　総統の人生の写真』（1936）、H. ゲデケ／W. クルークの『国防軍のためのリクエスト音楽会を始めます』（1940 年）の考察を通じて、ベストセラーと戦争のかかわり、コレクタブルカード・アルバムという一見取るに足らない大衆的な印刷媒体が果たした国家主義的な機能、および戦時中のラジオ・映画・娯楽的著作のメディアミックスによる民族主義的公共圏の形成などを明らかにしたが、これらもまた従来の研究に新たな展開をもたらし得る成果である。

（6）加えて、考察の対象となったベストセラーの多くが、その作家や出版社に多大な経済的利益をもたらしたことも、詳しく跡づけられた。その先頭に立つのが A. ヒトラーの『わが闘争』（1925/27）であったという意味で、この点については、必ずしもジャンルは関係ない。だが、

このことは、政権による厳格な管理・規制にもかかわらず、当時のドイツの書籍市場に私経済的なメカニズムが機能し続けており、ある程度自由な著述・出版活動の余地があったことの証左として、大きな意味を持つ。

（7）以上のような考察を踏まえて、最終的に、本研究全体の成果の総括として、上記の 12 ジャンル・100 作品の概要を取りまとめ、ベストセラーという観点から見たナチス時代の文学空間の自由で多様な様相を詳細に把握した。それによって、第二次世界大戦中のドイツの前線兵士の読書実態に関する研究代表者の従来の研究成果を継承・発展させて、ナチス時代全体の文学受容の実態を明らかにするという本研究の目的は、おおむね達成されたと言える。

以上の研究成果は、ナチス時代の文学を研究する上で、イデオロギー的な観点にとらわれることなく、当時の文学の実態を明らかにするための新しい視点や方法があることを示し、ナチス時代についての常識的な見方とは異なる、新たな見方を切り拓き得るという意味で、独自性を有する。また、ナチス時代の文学に関する今後の研究はもとより、ナチズムに関連する幅広い分野の研究にも応用が可能である。

今後は、本研究で選定したベストセラーの個々の作品の特色についてさらに考察を深めるとともに、ナチス時代の文学がいわゆる「統制」という言葉が喚起する画一的・抑圧的なイメージとは相容れない多様性を帯びるにいたった原因をより詳しく解明することが求められる。また、本研究を通じて得られた新たな知見に基づき、従来の研究の二重の問題点を補うべく、ナチス時代の通俗科学的著作における科学技術とナチズムのかかわりといったテーマに取り組むことも課題としたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　5件）

１．著者名 竹岡 健一	４．巻 59
２．論文標題 『ミツバチ・マーヤの冒険』における「ミツバチとスズメバチの戦い」について―― 戦争とベストセラーのかかわりに関する一考察	５．発行年 2021年
３．雑誌名 「かいろす」の会『かいろす』	６．最初と最後の頁 １～１８
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 竹岡 健一	４．巻 164
２．論文標題 ナチス時代の科学小説における科学技術の濫用について――K．A．シェンツィンガーの『アニリン』を例として	５．発行年 2022年
３．雑誌名 日本独文学会『ドイツ文学』	６．最初と最後の頁 ４１～５７
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 竹岡 健一	４．巻 60
２．論文標題 コレクタブルカードとナショナリズム――『アードルフ・ヒトラー　総統の人生の写真』を例として	５．発行年 2022年
３．雑誌名 「かいろす」の会『かいろす』	６．最初と最後の頁 １５～４４
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 竹岡 健一	４．巻 60
２．論文標題 ナチス・ドイツにおける「リクエスト音楽会」について――メディアによる「民族共同体」の形成	５．発行年 2022年
３．雑誌名 「かいろす」の会『かいろす』	６．最初と最後の頁 ４５～７０
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 竹岡 健一	４．巻 46
２．論文標題 ベストセラーから見たナチス・ドイツの文学空間――上位100タイトルの分類と概要	５．発行年 2023年
３．雑誌名 鹿児島大学言語文化論集『VERBA』	６．最初と最後の頁 ４０～１２８
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 竹岡 健一
２．発表標題 ナチス時代のベストセラーについて
３．学会等名 日本独文学会西日本支部学会
４．発表年 2020年

１．発表者名 竹岡 健一
２．発表標題 『ミツバチ・マーヤの冒険』における「ミツバチとスズメバチの戦い」について――戦争とベストセラーのかかわりに関する一考察
３．学会等名 日本独文学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 竹岡 健一
２．発表標題 コレクタブルカードとナショナリズム――『アードルフ・ヒトラー　総統の人生の写真』を例として
３．学会等名 日本出版学会
４．発表年 2022年

１．発表者名 竹岡 健一
２．発表標題 ナチス・ドイツにおける「リクエスト音楽会」について――メディアによる「民族共同体」の形成
３．学会等名 「かいろす」の会
４．発表年 2022年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

researchmap研究ブログ https://researchmap.jp/k_takeoka/research_blogs

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関